

## 教育の歴史的発展とその構造に関する考察

－ ヨーロッパと日本の事例を中心に －

曾我 雅比児

岡山理科大学理学部基礎理学科

(2009年9月15日受付、2009年11月5日受理)

### はじめに—教育の語源から

日本語の「教育」にあたる英語の *education*、フランス語の *éducation* はともに、ラテン語の *educare* に語源を発しており、もともと植物や動物を「育てる」というほどの意味を有していたと言われている<sup>1)</sup>。また、ドイツ語の *Erziehung* の語も、語源的には植物や動物の栽培・飼育を意味しているという。そしてこれらの語が人間に適用された時、子どもを養い育てるという意味で始源的には使用されたのであろう。一方、漢字の「教育」という熟語も、親が子どもを大きくするという意味の「育」という事実に、上から施すこととならうことを同時に意味する「教」の字が付け加わり成立したものと考えられている。

西洋と東洋の両地域において別個に成立した「教育」という概念は、この語源的考察が示すように、人間を含めた動物一般に共通する「子育て」の事実に対応するものである。しかし、「教育」という語は、このような生物学的な語源の意味を越えて、人間の生活行動にのみ特有な様々な意味あいを加えて今日使用されていることは、その後の歴史の示すところである。このように「教育」は人類の発生の時以来今日に至る普遍的現象であると同時に、時間の経過とともに変形され意味を付け加えられ、新しい概念に統合されてきたという歴史的性格を極めて色濃くもった社会現象でもある。

本論は、人類の発生から近代社会の登場の時にまで対象時期を限定し、教育行為の発展を跡付けることによって教育の歴史的構造を考察するとともに、わが国の教育史においてその歴史的構造に該当する具体的事例を検討整理することを課題とする。

### 1. 原始社会の教育

#### (1) 概論

考古学や人類学が教えるところによると、人類（原人ピテカントロプス）の発生の起源は数十万年以前に求められ、しかもその当初より、石器作製や居住形態などに見られるように、他の動物とは明らかに異なる生活行動様式をとっていたようである。人類と他の動物の生活行動上のこの相違は、他の動物が自らの個体維持や種族保存のための条件のほとんど全てを遺伝に負っているのに対し、人類はその条件の相当部分を模倣による学習によって獲得するところに由来するものといえるであろう。人類にのみ認められるこの生活様式は、基本的には、その恵まれた大脳生理の機構に負っているといえよう。人類の歴史は、一面では、脳の前進的な拡大の歴史であるともいえるが、その端緒をなした出来事として、直立歩行の事実を見落とすことができない。なぜなら、人類は直立歩行をすることにより両手の自由を獲得し、道具の使用を可能にしたからである。道具は、生産の拡大をもたらしただけでなく、その作製、改良、使用法の伝達・学習をめぐって、人類の頭脳に様々な刺激を与えてきたのである。

一方、人類には、様々な音声の発声に適した器官が備わっていたことも、その独得の生態を形成する上で極めて大きい要因として作用した。発達した脳の働きが音声器官に刺激を与え、言葉というコミュニケーションの手段を獲得することにより、人類は、言葉を通じての学習行為を定着させただけでなく、高度な情報の相互伝達を通して、複雑な生活環境の変化に対しても有利に対応する術を身に備えたのである。

原始共同社会は、その低い生産水準に制約を受け、比較的狭い土地の上に、数十から数百単位の人口から成り立っていたものと推測される。全体が第1次集団ともみなせるこの社会においては、成員間の社会生活は単純であり、文化も極めて単純であった。そして、社会は常に、外敵や飢餓にさらされていたものと思われる。

原始社会における教育は、当然ながら、社会のこのような実態を反映したものであった。社会の成員の生活の全ては、衣食住の資を入手するための生産労働にあてられていた。子どもたちは、直接的な生産労働からは解放されていたが、両親のもとでのしつけや集団生活の経験などにより、その社会・集団への帰属意識を身につけ、倫理的・宗教的価値やタブーに枠づけされた集団の標準的行動様式を習得し、更には集団の地位の体系の中での自らの役割行動を獲得していったものと思われる。このような基礎的過程に並行して年長の子どもたちは、大人たちとともに、実際の生産労働に従事することとなる。そこでは、子どもたちは、大人たちの行動を見よう見真似によったり、大人たちの意識的な働きかけを受けたりしながら、その社会に必要な生活や生産にかかわる技術の学習活動の仕上げを行った。原始社会や現代の未開民族などにおいて広くみられるイニシエーション (initiation、入社式) の行事は、大人の仲間入りをしようとする少年たちに様々な試練を課す儀式であるが、その様々な試練には、その社会・部族が主として従事する生産労働の担当能力を吟味する目的のものが多くはそのためであろう<sup>2)</sup>。

このように、原始社会の教育は、「子育て」という動物一般に共通する本能的働きかけの過程を基本にしながらも、具体的生活、実際の生産労働のなかで、その社会・種族の保存を目的とした働きかけを加えながら、子どもを生理的にも文化的・社会的にも成熟した存在に形成してゆく営みであった。そして、この意味での教育は、現代のような文明社会においても、子どもたちが最初に経験する教育であることから「始源的教育」<sup>3)</sup>ともよぶにふさわしいものである。

## (2) 縄文時代の生活と学習

今から約1万年前に氷河時代が終わり、更新世の時代に入ると、気候は温暖となり、海面が上昇し、日本列島が形成され始めた。列島に住む人々も豊富な土器の使用をともなう新しい文化を営み始めた。彼らの土器は一般に表面に縄目やむしろの文様が付けられていることから縄文土器と呼ばれ、この縄文土器を用いる時代の文化という意味でこの時代の文化を縄文文化と呼んでいる。縄文文化は、その後紀元前4〜3世紀頃に弥生文化に交代するまでの数千年間、列島全体に浸透していった。縄文早期の人々は採集経済を主としており、獲物を求めて転々と住居を変えていたようである。しかしやがて人々は食料の入手が容易な海岸や河川周辺の湧き水が近くにある日当たりの良い台地に堅穴住居と呼ばれる住居を作り、集住するようになった。縄文早期の他に集落は2〜3戸、10人程度の小規模であったが、中〜後期になると10数戸、数十人規模の大集落も見られるようになった。このような大規模集団となると、みんなで選んだ指導者を中心に統制ある生活を営んでいたことが想像できる。指導者は祭祀を司るとともに食料の獲得を共同で進める上での指示・命令も行ったであろう。子どもたちも大人たちと生活や行動をともし、仕事(狩猟、採集、耕作、土器製作 etc.)を手伝うことによって、見習い・聞き習いしながら、様々な知識や技術を習得し、共同体の習慣・軌範などを体得し成長していったと考えられる。このような教育の形を無意図的教育という。

## 3. 古代社会の教育

### (1) 文字の発明と学校教育の発生

紀元前4,000年頃から2,000年頃にかけて、世界の4大文明地域に古代文明が成立し、一部の地域では「学校」の原初的形態が登場してきた。この時代には、農耕技術や土木灌漑技術、あるいは交通輸送手段の発展などを背景として生産力が飛躍的に高まり、人々をして村落共同体を去らせ、都市国家に定住させることを可能にした。かくて大規模化した人間集団は社会生活を複雑化し、それにともない生活に関する諸々の仕事の専門分化を押し進めた。そして、仕事の専門化は、それにかかわる知識・技術を量的に増加させ、質的に複雑化し、更なる専門分化を導くこととなる。

一方、このようにして累積する知識・技術の伝達が、もはや単なる記憶に基づく言葉を媒介としてだけでは不可能になった時、人類は文字という伝達媒体を発明した。「文字の発明は、学校を必要とする最大の要因であった」<sup>4)</sup>と言われるように、学校という組織は、発展増加した生産に関する知識・技術を伝達する手段として発明された文字を習得する場として登場してきたものといえよう。

しかしながら、当時の大多数の民衆は、依然として、低水準の、そして文字による情報伝達を必要としない水準の農業や手工業などに従事していた。民衆の子どもたちも、以前の社会におけると同様に、両親やまわりの大人たちとの共同生活のなかで、生活や労働に関する知識や技能、あるいは価値規範を学習・習得していたのである。

このように、「日々の生活過程から独立に存在するもの」<sup>5)</sup>であった当時の文字文化をめぐる、その習得を必要とする者とそうでない者の間に、教育の形態の相違が生じてきた。生産労働から解放された少数の支配者層は、文字文化の習得を必要とし、そのために「学校」形式の教育という制度的教育に依拠した一方、文字の習得を必要としない一般民衆は、日々の生産労働の過程を媒介とする「生活」形式の教育によって自らの子弟を育てあげていったのである。学校を産み出し、学校を必要としたのは、日々の具体的生産労働から解放され、暇な時間を享受していた一部の特権支配階級であった。このことは、学校を意味する英語の school の語源が、ギリシャ語の余暇を意味する scholé にあるということからもうかがわれる。

初期の学校は、余暇を持てる人々が、その時間をフルに使って、習得困難な古代文字を学習する場であった。当時、文字は特権支配者層の専有物であったとはいえ、専門分化された職業技術・知識と密接に結びつきを有していた関係上、文字習得のための学校も、たとえ生活から遊離した場に存在したとはいえ、生活上の実用性という点で日常の具体的な生活に接点を有していたであろう。たとえば、歴史的に最古の学校といわれるエジプトの神殿学校や宮殿学校などでは、その主たる機能は、支配階級などの子弟に文字を教授し、神殿や王宮の書記官を養成することにあったといわれている<sup>6)</sup>。そして書記を養成するためには、書記という仕事の性質上、文字教授だけでなく計数法や占星術、あるいは錬金術をもこれらの学校では兼授されていたといわれるが、これらの学問は全て実務的な問題処理のためのものであり、抽象的な理論体系ではなかったようである。

## (2) 望ましい人間像意識とその追求

古代社会は、エジプトやギリシャにおいても、インダスや中国においても、基本的には奴隷制の社会であった。奴隷の存在は、肉体的生産労働から完全に解放され、精神的活動に余暇を充当する一群の人々を生み出した。彼らの活動により、生活から離れたところの文化所産が徐々に高級化、抽象化されてゆくこともない、そのような文化活動が生み出す精神的諸価値を体現することこそ、多数の奴隷を従える統治者にとって必要な課題であるとの自覚が支配階級の人々の間に定着していった。このような流れの中で、学校も、実益のための文字習得の場という当初の性格から脱皮し、高級な文化所産を習得し、もって統治者としての徳性や教養を磨く場としての性格を帯びるようになった。また、教育内容もそのような要請に沿って幾つかの教科に統合されるようになり、ここに制度的教育としての実質が備わってきた。

たとえば古代ギリシャの都市国家(ポリス)においては、支配者としての自由市民に求められた人間像は、ポリスのために身命を捧げる有能な戦士であり統治者である国家的政治的人間(ポリス的人間)にあった<sup>7)</sup>。そのために、自由人の子弟には、体育と音楽を中心とする教育が伝統的に与えられてきた。体育は肉体鍛練のための教育であり、具体的には戦闘技術を練るための教育であった。音楽は読み方、書き方、算術、詩、音楽などを含む魂の教育の総称であった。体育により身体の均整をととのえ、音楽により精神のハーモニーを養い、もって心身の調和的に発達した人間を、ギリシャ人は理想的人間としたのである。子どもたちは、通常、7歳頃からペダゴグ(教僕)と呼ばれる奴隷に付き添われて、パレストラ(体操教習所)およびディダスカレイオン(教授施設)に通い、初歩の読み書き、算術、詩の朗吟、音楽や競争、跳躍、水泳などの体操を学習する。15~16歳頃には、ギムナシオンと呼ばれる国営の体育場に通い、いっそう厳しい体技、武技の練磨に励んだ。そして成人の後も彼らはギムナシオンに通い、心身の練磨に励むべきとされていたと言われている<sup>8)</sup>。

やがて、ローマ時代に入ると、自由市民を教養ある政治的人間に形成せしめるための教育課程はより整備され、3学4科と呼ばれる形態をとるようになる。3学とは、文法学、修辞学、論理学の言語関係教科を指し、4科とは、算術、幾何、天文、音楽の各教科の総称であった。3学4科は別名7自由科とも呼ばれ、ギ

リシャ後期に提唱された「普遍的教養」(エンキクリオス・パイディア)を備えた政治的人間という、ローマの自由市民の抱く理想的人間のための必須の教科とされたのである。

一方、古代中国(周)においても、聖賢政治の理想から、六芸(りくげい)の習得が政治人たる士大夫の教養として要求され、学校教育の目標とされた。六芸とは、礼(礼法)、楽(音楽)、射(弓術)、御(馬術)、書(記録)、数(算法)の6教科を指し、その基礎を「小学」で、その完成は「大学」において目指された<sup>9)</sup>。古代中国の最盛期である唐の時代に入ると官吏養成の学校教育制度は整然と整えられ、後代の諸王朝や朝鮮、日本のそのモデルとなった。中央官庁の「国子監」が学政を統轄し、入学資格が身分によって異なる6つの直轄学校を支配下に置いていた。最上級身分(文武三品以上)の子弟にしか入学が許されない学校が「国子学」であり、以下「大学」(四、五品)、「四門学」(六、七品および庶人の秀英)、「律学」、「書学」、「算学」(いずれも八品以下および庶人の好事者)と続き、6校併せて2,210名の定員を擁し、各校とも博士と助教が教育にあたった。これら各学校は、それぞれカリキュラム、修業年限、学習順序、試験方法など明細に定められていた。学生たちは尚書省が主宰する官吏登用試験である科挙に備えて学習に励んだ。そのうちの成績優秀者が特に推挙され、中央での本試験受験の資格を与えられたようである。

以上、このように古代社会においては、大多数の一般民衆の生活を通しての機能的教育の形態とは別個に、支配階級のための学校形式の教育形態が登場し、その主要な機能も、単なる文字の伝達・教授を超えて、統治者として必要な全面的教養の知識教授とともに、統治者としての人格陶冶的な全人教育へと拡大していったのである。

### (3) わが国の事例；大学寮の創設と変容

大化の改新(645)にともない成立した律令国家は中央集権の国家であった。中央には天皇の元に二官八省の行政府と官人機構が整備され、地方は国・郡に分けられた。全国の人民の戸籍を登録し把握することによって口分田を班給し、租・庸・調などの租税を徴収するシステムが作り上げられた。このシステムの運用には文字を使いこなす能力および数量処理能力を備えた大量の官人が必要であった。この必要に応じて唐の「国子監」をモデルとした「大学寮」が創設されたのである。

『大宝令』や『養老令』によると大学寮は式部省に属し、大学頭以下6名の官僚と、そのもとに下級吏員が職員として配属されていた。学科組織としては本科にあたる儒学科(後の明教道)と数学科(後の算道)が置かれた。本科には博士1名、助教(すけはかせ)2名、音博士(こえのはかせ)2名、書博士(てのはかせ)2名が配当され、定員400名の学生の教育にあたった。数学科では算博士2名が30名の学生を教育することになっていた。入学が認められる者は基本的には五位以上の貴族(公卿、殿上人)の子弟と古くから文書業務に携わってきた渡来人氏族の史部(ふひとべ)の子たちであった。

大学寮の教育目的は基本的には、儒教の基本教典の教授を中心に、官吏登用試験である「貢举(くこ)」に備える教育を行うことであった。しかし現実には、父祖の功績により子孫が21歳になると一定の位階を与えられるという「蔭位(おんい)制度」の存在が大学寮の官吏養成・登用機能を著しく阻害していた。例えば、大学寮への入学資格を有する貴族たちの最下級のランクである従五位の位を父にもつ子は自動的に従八位上が与えられることになっていた。これは貢举試験の最難関である秀才試験の合格者に与えられる正八位上の位に比べれば、わずか3階級のみ劣る位であった。逆に、親が三位の子は従六位下の位を与えられ、これは秀才合格者に与えられるその実に5階級も上の位なのである。これらのことから、大学寮における官吏養成の意義は中下級の貴族の子弟にのみ当てはまり、国家運営の中枢を占めていた高級貴族の子弟であり、大学寮への正規入学資格を有していた御曹司たちにとっては有名無実と化していたといえよう。したがって、彼ら上級貴族たちは大学寮の教育に官吏養成とは異なる機能を求めるようになる。律令国家の官吏養成を目的とした大学寮は、上記したごとく、本科である儒学科を中心に特設的な数学科(算道)を加えた2学科構成で発足した。しかし官吏養成機能が形骸化するにつれ、平安時代に入ると、上記2学科に加え、法律学科(後の明法道)と文学科(後の紀伝道)が新設され4学科制へと移行していく。法律学科の新設は律令体制の補強のためであり、唐の学制をモデルとした改革であった。しかし、文学科は唐の学制には存在しない学科であり、中国の歴史書や詩文集の学習と習得を希求するというわが国独自の需要によるものであった。そしてこの文学科こそがこの後最も人気のある学科へと成長していくのである。蔭位の制度のお蔭で大学寮教育に魅力と意義を見いだせない中・上流貴族たちの大学寮離れに対して朝廷は様々な入学奨励策をとった。しかしそれは文学科への入学希望者の増加という効果を生み出し、表面的には大学寮の隆盛をもたらしたが、

逆に官吏養成機関としての本来的機能を低下させる結果をもたらしたのである。中・上流貴族たちの志向は律令国家体制を支える実学（儒学、法律、数学）学習を離れ、管弦や詩歌に秀でる「三船ノ才」や漢詩・和歌に長ずる「和魂漢才」への憧れへと移っていったこと、そして彼らの教育にかかる期待も大きく変容していったことをこの文学科（紀伝道）の隆盛は示すものであろう。

#### 4. 封建社会の教育

##### （1）概論およびヨーロッパの事例

中世の封建制度の担い手は、西欧においてはローマ帝国内に侵入し支配権を確立したゲルマン民族であり、日本においては京都の貴族政治を打倒した東国の武士階級であった。彼らは、主君から与えられた一定の土地とその土地人民を世襲的に領有し、地方的独立性をもった領域支配権を確立した。

封建時代は領国相互の争闘が続く不安定な時代であった。封建領主たちは自らの不安定な支配関係の名目的拠り所として、また武力に依拠する自らの不安定な精神的拠り所として、神の権威や宗教の教説を必要とした。一方、教会・寺院勢力も、自らの宗派の布教活動を保障する条件として、封建領主たちの積極的な庇護を必要としたのである。ここに、武士と僧侶・聖職者が支配階級を形成し、その下に農村共同体の隸民や農奴達が被支配階級を構成するという、中世封建社会の支配-被支配の関係が成立するのである。

中世の社会においても、古代社会と同様に、教育の実態は、特に学校形式の教育は支配階級たる武士と僧侶にほとんど限定されていた。そして、そこでの教育は統治者としてふさわしい教養の教授と人格の陶冶を目的としたことも、古代社会の学校と同様であった。ただ、古代社会の教育と異なるところは、中世の組織的な教育は教会・寺院を中心にして行われた点である。

中世教育の理想的人間像は宗教的・道徳的人間であったということが出来るであろう。キリスト教的共同社会に包摂されたヨーロッパにおいては、とりわけその傾向が強かった。教育上の関心は、古代社会における「人間中心主義」からキリスト教的「神中心主義」へと大転換が行われた。人間に自然な興味の追求は抑制され、代わりに神の教えに従う厳格な訓練が重んじられるようになった。神の存在を信じ、教義を正しく理解し、宗教儀式を厳守し、来世の至福を願うこと、これらが正しき人の生活スタイルとされたのである。聖職者に要請されることは神の確かな存在を信じ、イエス・キリストの福音を伝道し、信者の数を増やすことにあった。神の存在は信仰と理性によってのみ与えられるものと考えられていた。したがって、僧侶教育の理想は、道徳的・宗教的品性を陶冶することにより信仰心を一層高めることと、神を認識するための理性を練磨することが調和的に展開されることにあった。そのために、当時の代表的な教会学校である司教座聖堂学校や修道院学校においては、ギリシャ・ローマ的伝統である 7 自由科が教育課程の重要部分を占めていた。しかし、このことは、ギリシャ・ローマ的文化そのものを鑑賞する目的のためではなく、神学を深く広く学ぶための予備学として位置付けられていたことはいうまでもないであろう<sup>10)</sup>。

ヨーロッパにおける修道院は聖ベネディクトゥス(480 頃-547 頃)が創建したカッシノ山中の修道院における彼が定めた戒律（ベネディクトゥス戒律 73 ヶ条）に基づく方式をモデルとして急速に普及した。修道院は神への奉仕のための訓練組織であり、修道士は清貧と貞節と服従の 3 誓約を守り、規則正しい祈りと瞑想と労働による共同生活を営んでいた。修道僧たちは自らの労働として、農民に模範を示し、職人に技術を教えることが課されていた。また一日数時間の指定された書物の読書も戒律によって定められていた。読書用の写本や古代の文献の筆写、そして書物の保存なども修道僧の労働の一環として行われた。こうして修道院は、生活そのものが教育であっただけでなく、図書館かつ学術研究の場であるとともに出版事業も営む総合的な教育文化機関でもあったのである。修道院の教育は当初は修道僧自身もしくは修道生活志願の青年に限られていたが、後には修道院生活を志願しない地域の有力者の子弟にも開放されるようになった。この点、日本の鎌倉・室町時代の有力武家の子弟が寺院で基礎教育を受けた例と類似する。

ヨーロッパ封建社会のもう一方の支配階級たる武士集団は一般的に騎士階級と呼ばれている。彼らの身分は封土同様世襲化し、「騎士叙任式」という特別な儀式を経て継承された。その叙任式に備えて、騎士教育は領主の宮廷において行われた。通常 7 歳頃から始まり 14 歳頃までの小姓期間と 14 歳から 21 歳までの従者時期の 2 段階を踏んで行われた。小姓は常に婦人に付き従い、城内の簡単な仕事から始め、食卓にかしずくことが主要な仕事であった。従者になるとよりきめ細かい婦人への奉仕と献身が期待され、狩猟への付き添い、読書会や宮廷娯楽への参加が求められた。そのために従者は日頃から乗馬や刀槍の実践的訓練に励むと同時に吟遊詩人の唱歌や音楽の練習そして宮廷用語であったフランス語の学習なども行わなければならな

った。ただしこれらの学習は通常宮廷生活を通して習得されるものであり、学校形式の教育を通して吸収されるものではなかったようである。騎士叙任式の時期が近づくと騎士道の宗教的側面に力が注がれた。叙任式では、騎士候補者は司祭から剣の祝福を受け、教会を守護し、婦人や貧者を保護し、国家の平和のために全力を注ぎ、人々のために身命を捧げることを誓わなければならなかった。

一方、被支配階級である農民や手工業者たちの教育は、基本的には、それ以前の時代に行われてきた生活を通しての教育と何ら異なる所がなかったといえよう。依然として、子どもたちは、家族や共同体内での対面的接触のもとに、労働や家事についての具体的な体験を通して、成人に必要な知識や技術についての訓練を受けていたものと思われる。しかし、ここで注目すべきは、教会と農民との関係である。教会は農村共同体に基盤を持ち、キリスト教の祭日の行事や教会での日曜説教などを通して、農民に対する社会教育的機能を豊かに有していた。特に日曜説教においては、神や領主への服従を説くだけでなく、領主命令の有効な伝達機関ともなっていたといわれている<sup>11)</sup>。つまり、教会や僧侶たちは、農民大衆に対して封建的秩序を維持するための教化的役割を意識的に果たしていたわけである。ここに、中世にいたって初めて、支配階級からの被支配階級に対する意図的働きかけ（教化）ということが、教育の一形態として登場してくることになるのである。

また中世後期には、十字軍の遠征の結果として商業活動が活発化し、各地に商業都市が発生し、第三階級ともいえる都市市民層が台頭してきた。彼らは、知性と技術を必要とする自らの職業上の必要性から、都市学校と総称される各種の職業教育のための学校を自主的に開設し始めた。例えば、フランドルやイタリアなどの商業都市に、商人の子息たちを対象に、初歩のラテン語の教授だけでなく、外国語や数学、簿記などを教える学校が開かれていた。これらの学校は私人の経営によるものであった。多くの場合教師自身が該当業務の実際の業務者もしくは商人であったので、これらは学校であると同時に徒弟制度の従属物でもあったといえよう。いずれにせよ、支配階級に属さない人々の間に、自覚的な自己教育の要求と運動が、教育の一形態として、ここにその萌芽を見せることになるのである。

以上、近代社会の登場に至るまでの間の人類の教育的営みを振り返る時、そこには3つの教育の歴史的形態を認めることができるであろう。第1は、支配階級内での自己再生のための学校形式の教育であり、第2は支配階級から被支配階級に対する意識的、意図的な教化であり、第3は、被支配階級内部に目覚めた、自己の要求に基づく自覚的な自己教育要求であり、その組織化の運動である。

## （2）わが国の事例

### ① 武士の登場と武家教育

#### A. 鎌倉・室町期；金沢文庫と足利学校

日本のいわゆる中世期、鎌倉・室町時代は、武家が勃興し、貴族や僧侶らの旧勢力に代わって覇権を確立していく過渡期であった。古典研究や有職故実の学問の担い手であった貴族や大寺院勢力の衰退は必然的に教育の担い手の縮小をもたらした。しかるに、新興勢力である武士階級は当然自らの権力の源泉である武芸の向上を第一とし、学問教養のことは二次的関心の対象に過ぎなかった。何よりも武士階級内部に直接教育を担うに足る力量が不足していたといえよう。したがってこの時代は制度的な学校教育は振るわない時期であった。この期の代表的な教育施設として指摘できるものは、鎌倉時代の金沢文庫と室町時代の足利学校だけである。

金沢文庫は北条氏の一族で政権の重鎮として活躍した金沢実時(1224・76)によって基礎が築かれ、その子顕時(1248・1301)、孫の貞顕(1278・1333)へと引き継がれ、全国にその盛名をとどろかせた文庫(図書館)である。実時は政治のかたわら学問にも心血を注ぎ、数多くの漢籍や内典を収集するとともに仏教にも深く帰依し、一族の菩提寺として本拠地の武蔵国六浦荘金沢の地(横浜市金沢区)に称名寺を建立した。したがって、金沢文庫は称名寺と一体のものであり、称名寺の僧侶教育の便宜のために収集されたという側面もあったようである。

戦国時代に来日したフランシスコ・ザビエルがイエズス会宛書簡の中で「日本最大の大学」と賞賛した足利学校は当代きっての教育機関であった。しかしその起源については諸説があり詳らかではない。明らかなことは、室町時代の1430年代に時の関東管領上杉憲実(1410・66)によって再興されたという事実である。再興後の足利学校では1446年に「学規三条」が定められ、漢籍の学習を中心に教育が行われるようになった。学生は大部分が僧侶であったが、俗人が僧形になって入学し、退学後還俗する方式で学ぶ者もいたようであ

る。戦国時代に最盛期を迎え、漢学の他易学や医学、兵学、天文学等時代が求める学問も講じられるようになった。最盛期には「学徒三千人」と称されるほどにぎわったが、江戸時代に入り平和な社会が回復すると、幕府の保護があったにもかかわらず再び隆盛を取り戻すことはなかった。何はともあれ、京都から遙か離れた関東の地に金沢文庫や足利学校という当代最高の文化施設が設立されたことは、武士の時代の到来を象徴する出来事であったといえよう。

鎌倉～戦国時代における武士階級が主体となった教育制度史的事実は以上の如くであるが、金沢文庫にせよ足利学校にせよ、それらを武家の子弟教育のための施設という観点からすると到底そのような機能を実質果たしていたとはいえない。なぜなら、上述したように両施設はいずれも仏教寺院との関連が強く、教育＝学習の主体は僧侶であったといえるからである。これらはあくまでも信仰心の篤い有力武家が主宰した宗教的文化施設と位置づけることが順当であるといえよう。

家を基盤とする武家の子弟教育は、基本的にはそれぞれの家において父親が自ら模範を示しつつ、生活を通して行われた。鎌倉～戦国期の武家は、江戸時代の武家とは異なり、常在戦場の生活環境に置かれていた。したがって、子弟教育は戦場と直接関連を有する実践的な弓馬の修練を基本として、死に直面する強い精神力の涵養も重視されたのである。このように理想は、文武両道に優れることであり、そのための教育的手引書として家訓が多くの家で遺された。家訓とは父から子へ、あるいは家長から家族へ与えられた教訓・訓戒の文書のことである。家の興廃の激しいこの時代、武家の長は後継者の資質形成の便宜のため、また一族・郎党の団結を図るため、様々な教訓や戒めを家訓という形で家の構成員たちの心に内面化しようとしたのである。代表的な家訓としては、たとえば、鎌倉時代の北条重時の「極楽寺殿御消息」、室町時代の今川了俊の「今川了俊制詞」、戦国時代の北条早雲の「早雲寺殿廿一箇条」などが有名である。

## B. 江戸期；昌平坂学問所と藩校

馬上天下を統一した徳川家康は、武力によって掌握した天下の太平は文治によって維持されるべきだと考え、聖人君主の道を説く儒教に治国の要諦を見だし、新しい時代の指導理念を求めた。そのために家康は当代きっての朱子学者であった藤原惺窩(1561・1619)やその門人林羅山(1583・1657)を政治顧問として招聘し、為政者としての治道のあり方を講述させ、それを『貞観政要』として刊行させたのである。家康のこの儒教による文治徳政の理想は代々の将軍に受け継がれ、17世紀後半幕藩体制の相対的な安定化にともない、いわゆる文治政治として確立される。支配階級である武士による武家政治は道義化されるべきであり、武士の行動を通して天下の人倫の秩序を打ち立てるべきとする徳治思想の涵養を目的に、儒学を中心にした学校形式による武士教育が着目されるようになる。

昌平坂学問所はこの目的に沿う幕府直轄の学校であり、旗本・御家人の子弟の教育にあたるとともに、各藩の藩校の教員養成の機能も果たした江戸時代における最高学府であった。この学校の起源は、幕府の儒者林家の初代羅山が三代将軍家光の援助を受け、1630(寛永7)年に上野忍岡に設けた私塾に求めることができる。五代将軍綱吉の時(1690)に林家塾は神田湯島に移築拡大され湯島聖堂と名称も改められた。学問好きの将軍であった綱吉はしばしば聖堂での積奠(せきてん；孔子を祀る行事)に臨み、また自ら経書を講じもした。湯島聖堂はその後林家の人材不足などにより甚だしく衰微し一時はその無用説も取りざたされたが、松平定信は寛政の改革においてその立て直しを図った。1790(寛政2)年、定信は異学の禁を発し、聖堂と林家塾においては正学である朱子学以外の講究を禁じたのである。また、学問吟味と素読吟味を創始し、幕臣子弟の朱子学の理解度を試験する試みも始められた。これら一連の政策は幕府内の体制秩序の再確立のためにはイデオロギー統制が最重要であるとの認識に基づくものであり、朱子学がとりわけ重視する上下関係の秩序とその中での節義・名分を重んじる思想に染め抜かれた行政官僚の養成を意図したものである。このようにして聖堂は林家の私塾的性格を弱められ、幕府の公的教育機関としての性格を強められ、ついに1797(寛政9)年の改革によって幕臣の人材養成を直接の目的とする幕府の直轄学問所へと移管され、名称も「学問所」と改められたのである。

一方、地方の各藩も、藩士の子弟教育のため、昌平坂学問所をモデルとした直轄学校を設けた。これを藩校あるいは藩学と呼ぶ。ただし、藩校や藩学という呼称は明治以降に作られた用語であり、江戸期には「明倫館」や「学習堂」など固有の名称で呼ばれるか、単に「学問所」や「学校」などと呼ばれていた。しかしながら本論においては、これら類似の学校の総称として藩校という用語を使用することにする。藩校は江戸中期以後急速に普及し、幕末維新期にはほぼすべての藩に設置された。最も増加が激しかったのは、寛政か

ら文政にかけて（18世紀後半～19世紀前半）と明治維新以後廃藩置県（明治4年）までの2時期であった。ともに幕藩体制の危機的状況に直面した時期であった。したがって藩校設立の主たる要因としては、三民の上に立つ指導者としての教養と人格向上を図るという一般目的以外に、幕政の危機、特に財政危機とそれに随伴する士道頹廃現象に対処するための藩政改革の遂行を担う有能な人材育成という政治的目的が存在していたことを指摘することが出来る。

諸藩の藩校はその設立経緯から見てみると大きくは4つのタイプに分類されるようである<sup>12)</sup>。第1は藩士を対象とした講釈のために設けられた講堂から発展したもので、伊勢崎藩（群馬県）の学習堂や新発田藩（新潟県）の道学堂などが代表的なものである。第2のタイプは藩の儒官の家塾を藩校に発展させたものであり、岩槻藩（埼玉県）の遷喬館や久留里藩（千葉県）の三近塾をはじめ多数の事例が数えられる。第3は、聖堂を建立し釈奠を举行することから出発し、この祭典に付随する講釈を行う場として講堂が設けられ、それが後に藩校へと発展したタイプである。佐賀藩の弘道館などがその例である。第4のタイプは始めから儒学教育の理念と構想に基づき建設された藩校で、水戸藩の弘道館や庄内藩（山形県）の致道館などが挙げられる。

藩校への入学年齢は一般的には7～8歳頃で、15～20歳前後に退学する事例が多かったようである<sup>13)</sup>。藩校は上述したように、藩政の危機に対応するための人材養成という目的で設立される例が多かったため、入学を強制する藩が大多数を占めていた。藩校における学科目については、江戸時代前半期においては個人的徳と武芸の涵養を主目的に設立された藩校が大半だったため、漢学を中心に武術や筆学が加えられる程度であった。しかし後半期になると学問は個人的修養のためだけでなく富国強兵、殖産興業という藩の要請に応えるという国家的目的が強く表面に出されるようになり、算術、医学、洋学、兵学等の実用的な学科目が併設する藩校が増加した。

漢学の学習はまず四書五経などの経書を正しく読む「素読」から始まり、読書力が充実してくると素読に用いた経書の意味内容を解説する「講釈」に進み理解力の開発が目指された。読書力と理解力が増すと、今日の大学での演習に相当する「会読」や「輪講」に出席し議論のための能力を鍛えた。一般的にはこの段階での学習を最後に退学するという者が多かったようである。

## ② 庶民の教育

### A. 寺子屋の発生と普及

江戸時代は安定した平和な社会が続いたため、農・工・商業それぞれが大いに発展した。とりわけ都市を中心とする商業活動の活発化は全国的な商品流通機構の整備を進め、やがて農村をも巻き込んだ全国的な商品貨幣経済体制が形作られるようになる。それにともない被支配階級であった農・工・商の庶民レベルにおいても商品取引が日常化し、必然的に読み・書きの能力が必要とされるようになった。そのような社会的ニーズに対応して、庶民の日常生活に必要な初歩的な読み、書きを授ける施設である寺子屋（手習所）が自然発生的に設けられるようになった。とくに江戸期後期から幕末期にかけて全国的に普及し、明治初年には全国で約15,500校余りが存在していた記録が残されているが、実際にはその数倍はあっただろうと推測されている<sup>14)</sup>。寺子屋においては、「手習い」を主とし、その他「読物」あるいは「算用」等を併せ教える場合が多かったようである。手習いは「い、ろ、は……」から始まり、数字、十干十二支、町名、村名、名頭（源・平・藤・橘など有名な姓氏の頭字を列挙したもの）、国尽し（日本の諸国の名を列挙したもの）へと進められた。手習いは単に文字の習得を目的とした教授＝学習活動であっただけでなく、そこには行儀作法のしつけ的機能や、精神修養としての道徳教育的意味合いも含まれていた。

寺子屋での教授方法は基本的には個別教授であった。一人ひとりの子どもを師匠の席に呼び、文字の書き方や読み方を教え、その後自分の席に戻らせ自習をさせる方式がとられていた。子どもの学習はひたすら文字の読み書きを繰り返すドリル学習であった。江戸時代の子育て書の一つである『小児必用養育草』（1703）には「手習い勤め候事は朝十辺、昼三十辺、晩十辺習うべし」と、一日50回の反復学習を基本として教示している。

手習いの高い段階に進むと各種の往来物を使った学習が始まる。往来とは手紙のやりとりのことをいい、往復一対の書面の模範例をいくつか収録したものが往来物である。寺子屋の普及とともに数多くの往来物が出版され盛んに使用されたため、寺子屋の教科書を総称する言葉として往来物という語が使われたほどである。代表的な往来物として『庭訓（ていきん）往来』が広く用いられた。また身分（職業）別の往来物も作



られ、農民用の『百姓往来』、商人用の『商売往来』、大工等職人のための『番匠往来』、漁民のための『船方往来』などが有名であった。さらに女兒のためには『女庭訓』や『女今川』など封建社会における女子の生き方を教える教訓書が特別に作られ教授に用いられたのである。

#### B.幕府の寺子屋教育への関心

寺子屋のめざましい普及をもたらした直接的な主要因は上述したように商業資本主義の台頭・発展であったが、その普及を促進させた間接的な副要因として為政者である幕府や諸藩が寺子屋の教育を好意的に黙認するか時には奨励的介入を行ったという背景も指摘できよう。庶民層への文字の普及は為政者にとっても好都合なことであったのである。なぜならば、多くの庶民が文字を習得することは、為政者たちをして御法度や御触書、五人組帳前書などの法令類を文書の形で布達することを可能にし、そしてそのことは庶民支配・統制の集約的効率化を可能にするからである。

寺子屋の「手習い」には単に文字習得の働きだけでなく、道徳教育的機能も含まれていたと、先述した。寺子屋教育のこの点に着目し積極的にその機能の拡張を図ろうとする為政者も現れた。八代将軍吉宗もその一人である。彼の享保の改革は、幕府成立後 100 年の歴史的発展と諸矛盾を幕藩体制の引き締めという方向で収斂することを目指すものであった。具体的には都市商人の経済活動の統御、農村・農民の没落と疲弊の防止、幕府財政の再建などであった。そのために、倭約令による支出の抑制、有能な人材の登用、殖産興業の推進など積極的な施策を展開した。こうした一連の施策の中で、吉宗は教育の果たす役割にも注目し、上からの啓蒙・教化によって体制に従順な庶民の育成を図ろうとした。1722（享保 7）年の『六諭衍義（りくゆえんぎ）大意』の刊行がその一例である。六諭とは明の太祖が頒布した六ヶ条の「教民榜文」（一種の高札）であって、清朝の時代の儒学者がこれに解釈を加えたものが『六諭衍義』である。中国への留学僧がこれを琉球にもたらし、薩摩の大名島津侯がこれを吉宗に献上した。吉宗の命を受け、侍講であった室鳩巢（1658-1734）がこれを和訳し、解説を加えたものが『六諭衍義大意』である。為政者から見て善き人民の「六諭」とは次の 6 つの道徳的行為を指す。①孝順父母、②尊敬長上、③和睦郷里、④教訓子孫、⑤各安生理、⑥母作非為。吉宗はこの書を寺子屋の手習い教材として普及させ、期待する人間像を積極的に実現させようとしたのである。

#### C.町人間の自己教化運動＝石門心学

幕府、諸藩の武家政権は、例えば「慶安の御触書」（1649）や「天和の忠孝札」（1682）等、各種の御法度や御触書を発し、法令を遵守し、長上を敬い、分限をわきまえ、質素倹約の生活を守る庶民育成の働きかけを行ってきた。上述の『六諭衍義大意』の刊行と寺子屋の教材としての普及政策もそのような大衆強化政策の一環であった。しかし一方、文字の普及と人々の教養の向上にともない、支配される庶民の側からも、体制の中で自らの生活を豊かに積極的に律すべきであるとする自己教化の理念が生まれ、普及拡大する事態が生じた。その代表例が石門心学運動である。

石門心学は石田梅岩（1685-1744）によって創始され、門弟たちによって全国的に広められた町人社会の実践哲学である。京都の商人として商売に精を出しかたわら、学問にも励んだ梅岩は商人の生きる道について思索を重ね、1739（元文 4）年に『都鄙問答』を著し、商人の売利は武士の家禄と同等の価値あるものであるとし、営利追求こそ商人の社会的な存在意義であると論じた。商人は正直と倹約のモラルに基づく商行為を通して万民の生活に寄与し、天下の泰平に貢献することによって、人たるの道も実現されると説いた。梅岩の町人哲学は手島堵庵（1718-1786）、中沢道二（1725-1803）、柴田鳩翁（1783-1839）らの門弟によって心学講舎における道話（身近な例を挙げわかりやすく道徳を説くこと）という方法によって大衆化され、町人の生活体験をベースに神・儒・仏の三教の教えを融合させた町人倫理として近世社会に広く普及した自己教化運動であったのである。

#### おわりに

以上、主としてヨーロッパと日本を主たる対象にして、原始の時代から近代社会の直前に時期までの間の人々の教育営為の歴史的発展とその構造を考察してきた。また、その歴史的構造の構成内容に該当する教育史的事実をいくつかスケッチしてきた。原始～古代～中世と、相対的に静的な社会構造を維持してきた時代においても、人々の教育行為は着実に拡大進化し、複雑化していった。しかしその実相を見極めれば、大き

く3種の教育関係が相互に影響を及ぼしながらも（特に支配階級の教育が庶民の教育のあり方に）、相対的に独立した形で発展してきた様相が見て取れるのである。すなわち、第1は、支配階級内での自己再生のための学校形式の教育であり、第2は支配階級から被支配階級に対する意識的、意図的な教化であり、第3は、被支配階級内部に目覚めた、自己の要求に基づく自覚的な自己教育要求であり、その組織化の運動である。そして、これら3つの形態の基盤には、第1次集団（家族、近隣集団等）内での日常生活を通しての、子どもを生理的、文化的、社会的に成熟した存在に形成する営みである始源的教育が、歴史的に一貫して継続されてきているのである。教育という言葉の内実をなすこのような様々な側面が、時間の流れの中に位置づけられ、教育の歴史的構造を形作ってきたのである。

#### 【注】

- 1) 森昭『改訂現代教育学原論』国土社、1973年、p.13.
- 2) 長尾十三二『西洋教育史』東京大学出版会、1978年、pp.2-3.
- 3) 森、前掲書、p.64.
- 4) 碓井岑夫「学校教育」、吉田昇他編『教育原理—教育学（1）』有斐閣、1980年、p.22.
- 5) 森昭『人間形成原論』（森昭著作集第6巻）黎明書房、1977年、p.47.
- 6) 碓井、前掲論文、p.22.
- 7) 広岡亮蔵「教育課程の史的展開」、東京教育大学教育学研究室編『教育課程』金子書房、1950年、p.271.
- 8) 梅根悟『世界教育史』新評論、1967年、p.59.
- 9) 唐澤富太郎『日本教育史』誠文堂新光社、1968年、pp.58-59.
- 10) 広岡、前掲論文、p.295.
- 11) 長尾、前掲書、p.19.および p.25.
- 12) 石川松太郎『藩校と寺子屋（歴史新書＜日本史＞87）』教育社、1978年、pp.50-51.
- 13) 田中克佳編著『教育史』川島書房、1987年、p.214
- 14) 寄田啓夫、山中芳和編著『日本教育史（教職専門シリーズ2）』ミネルヴァ書房、1993年、p.51.

#### 【その他参考文献】

1. 石川松太郎他『日本教育史』玉川大学出版部、1987年。
2. 江森一郎『「勉強」時代の幕あけ—子どもと教師の近世史』平凡社、1990年。
3. 片桐芳雄、木村元編著『教育から見る日本の社会と歴史』八千代出版、2008年。
4. 木下法也、池田稔、酒井豊編著『教育の歴史—西洋と日本—』学文社、1992年。
5. 小針誠『教育と子どもの社会史』梓出版社、2007年。
6. 多田建次『学び舎の誕生—近世日本の学習諸相—』玉川大学出版部、1992年。
7. 土屋忠雄、吉田昇、斎藤正二編著『日本教育史（教育演習双書10）』学文社、1993年。
8. 三好信浩編『日本教育史（教職科学講座第2巻）』福村出版、1993年。
9. 山田恵吾、貝塚茂樹編著『教育史からみる学校・教師・人間像』梓出版社、2005年。

# **A Study of Historical Development and Structure of Education**

**– Examples of Europe and Japan –**

**Masahiko SOGA**

*Department of Applied Science,*

*Faculty of Science,*

*Okayama University of Science*

*1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, JAPAN*

(Received September 15, 2009; accepted November 5, 2009)

In this essay I studied and described historical development of humankind's works about bringing up younger generations in Europe and Japan from the primitive age to the end of the feudal age. Through that study, I was able to find out that three types of education were historically made up in both regions commonly. The first type was a school-typed education for younger men who belonged to the governing classes. The second one was a kind of enlightenment action by dynastic governments or religious authorities urging the populace to develop moral sense and to receive public order and so on. The third was a self-enlightenment movement between the common people, which produced a variety of educational institutions such as private elementary schools in Edo period of Japan or many urban schools for vocational training for their younger heirs in Modern Europe.